

第六章 文章は現代を救う

■書く力が思考力だ

これまで、自己演出としての文章の書き方について説明してきた。本書を終えるに当たって、文章を書くことが現代社会においてどんな意味を持つかについて、少し私なりの考えを述べておきたい。

私は、書くことの第一の意味は、国語力、そして論理力、分析力や教養を養うこと、つまり知的になることだと考えている。

最初に確認しておきたいのは、国語力こそが論理力を養うということだ。小・中学校などで、国語力がないと、算数・数学や英語ができて、だんだんと成績が落ちてしまうとよく言われる。人間は母語を使って考える。考えるということは、母語を上手に使うということにほかならない。だから国語力がなければ、数学もすじみちを通して考えられないし、英語も読解できない。国語力がつくと、思考力がつく。

では、どうすれば国語力・思考力が養われ、深い教養が身につくのか。昔から言われてきたのは、良書を読むことだ。しばしば指摘される現在の若者の論理力、思考力、読解力の不足は、彼らが良書を読むという習慣をほとんどなくしていることに由来していると言って間違いないだろう。したがって、もちろん、良書を読むことをもっと奨励し、その楽しさを、多くの若者に

にわかってもらう必要があるだろう。

が、良書を読むこと以上に国語力を養うのに適した行為がある。それが、文章を書くという行為だ。たとえば、野球を例にとると、いくら野球を観ても、野球をほんとうには理解できない。観ることが上手になるだけだ。が、少しでも野球をしたことがあると、選手の気持ちを含めて理解が深まる。つまり、実践してこそ物事の理解が深まるわけだ。文章も、実践して、つまり文章を書いてこそ論理力が養われる。

したがって、頭の訓練のためにも、文章を書くことが必要だ。前にも書いたように、教え子のなかに、文章を書くようになって驚異的に国語の成績が上がリ、それにともなって英語もぐんぐんと上がったという生徒がたくさんいるが、それはまさに、このような事情による。

現代社会では、自分で問題を見つけ、現実を読み取り、未来を予測し、分析し、論理的に思索し、それを発表して人と議論することが求められている。そのような能力は、まさに書くことによって得られるのだ。だからこそ、文章を書くという作業こそが、これからの社会では重要な意味を持つてくる。

若者には若者の考え方、感じ方がある。高齢者には高齢者の考え方、感じ方がある。それぞれの方がミニコミ誌やインターネットや手紙を通じて自分の意見や人生観を表明していく。そして、互いに議論を重ね、多様な考え方、感じ方を受け止めていく。そうすることが、一人一

人の能力を高め、ひいては社会全体を知的で活発にしていくと考えられる。

今や、子どもから高齢者まで、あらゆる人々が自分で考え、自分の意見を発表する力を養う時代が来ていると言えるだろう。そして、これまでの「ありのままの自分」を描こうとする従来の「綴方」でなく、もっと遊びがあり、楽しく、気楽な行為として文章を書いてこそ、そのような力が自然のうちに養われると思うのだ。

■文章はアイデンティティを拡大する

だが、もう一つ、文章を書くことには大きな意味がある。文章を書くことの第二の意味、それは、自分のアイデンティティを拡大することだ。

現代社会では、万事が受け身になり、とりわけ若者は疑似体験に慣れきっている。人間は自分で体験する数十倍、あるいは数百倍の情報を疑似体験によって得ている。テレビを通して偽の体験をし、パソコンを通して偽の体験をする。ゲームを通して戦争をするだろう。DVDやCDもコンサートの疑似体験だ。

疑似体験における問題点としてしばしば指摘されるのは、疑似体験と実体験の区別がつかなくなることだ。疑似体験を、あたかもほんとうに体験したように錯覚してしまう。同時に実際の体験も疑似的なものになってくる。つまり、実体験の疑似体験化とも言わなければならない。

だ。

もちろん、それも大問題だ。だが、もっと重大なことがある。それは、人間は実体験を通して自分を作っていく存在なのに、疑似体験しかなくなると、自分を作ることができなくなることだ。現代人は、現実の手触りが得られない。現実よりも疑似体験のほうにリアリティを感じている。そして、リアルな疑似体験と比べて自分の生活、自分の周囲を色あせたものと感じている。こうして、人間はリアリティを失ってゆく。現実を変革できるという意識をなくして、努力することも、変革の意志を持つこともなくなってゆく。

それだけではない。現代人は、文化を消費するばかりで、創造しない。かつて、遊びもけんかも創造行為だった。人に決められたルールに従って行動するのではなく、その場その場で自分たちでルールを作っていた。だが、今はそうではない。

現代人は、すべてがすでにできあがった世界のなかにいる。かつて、私が若者だったころにも、すでに世界はできあがっている気がしていたものだ。もうこれ以上、自分の入り込む隙はない、と感じたものだ。が、今から考えると、当時はまだまだすべてが未完成だった。自分たちで行動できる余地があちこちにあった。自分たちの力で世界は変えられた。

だが、現代では完全にすべてができあがってしまった。政治も経済も、一人の力ではどうにもできない。ルールは決まり、誰もがすでにできあがった立派な建物、立派なシステムの

なかにいて、仕組みを理解できる人などほとんどいない機器を使って、マニュアルどおりに生きている。マニュアルどおりにしかできない若者が批判されるが、若者は、マニュアルどおりにしかできないように強制されているのだ。若者が閉塞感を持つのは当然だろう。「自分たちにはついている隙がどこにもない。自分にできることは何も無い。自分がいなくても、何も変わらない」という意識を持っているに違いない。

ゲームソフトを作ったり、芸能界で活躍したりなど才能を生かす機会を持った一部の人間を除いて、一般の若者は以前にも増して自分たちの創意を發揮できない。自分で世界を築けない。自分を感じることができない。アイデンティティを確立できない。

だから、人と人とのコミュニケーションも築くことができない。現実感を持たず、自分を感じられず、自分の心を開かず、自己表現ができないのだから、他人との関係を築けないのも当然なのだ。最近、子どもたちの「キレる」「むかつく」という状態、そしていじめや自殺が問題になっている。そうした問題も、これらのことと無関係ではあるまい。自己表現ができず、アイデンティティを保てず、コミュニケーションできないから、すぐに精神のバランスをこわし、他者を攻撃する。他者との関係を作れず、自分を表現して他者と意思疎通を行うという行為ができないのだ。いじめという形でのコミュニケーションや、自殺という形での自己表現しのできない。

いや、若者ばかりではない。このような状況は中高年の方にも無縁ではないはずだ。

現代人は、若者に限らず誰もが、テレビのなかの生き生きとした人物に比べて、自分の生き方を色あせたものと感じている。社会的な拘束のなかでがんじがらめになった自分への不満がかつて以上に感じている。昔の人のように、恵まれない自分を宿命として受け入れることはできない。自分が生き生きとできる場所を見つけることができない。会社でも家庭でも、自由な自分を持たず、自分に自信が持てない。自分が生きているという実感を持たない。そうしたつるな自分をブランド品を買いあさったり、モノを消費したりすることによって埋めようとする。

だからこそ、私は文章を書くという自己表現の手段が現代社会には必要だと考える。

文章を書くという行為は、自分の力で自分の世界を作り上げることのできるものなのだ。時間もかからない。お金もかからない。原稿用紙と鉛筆、あるいはワープロやパソコンがあれば、簡単に自分の世界が作れる。自分だけの秘密の世界、自由で楽しく、不思議な世界が作れる。今まで、他人の作った疑似現実を見るだけだったが、文章を書くことによって、現実を自分の力で作れる。しかも、遊びの要素を入れることで、これまでの「ありのままに書け」という道徳的、教育的な作文から離れて、楽しみながら自分を作れる。

楽しみながら文章を書くことによって、ふだん、表に出せない埋もれた感覚、埋もれた意見

を表明することができる。ふだんは抑えられている自己を表現することができる。言い換えれば、抑圧を発散することができる。そうすることで、これまでの自分に閉じこもるのではなく、もっと違った自分、もっと拡大された自分を味わうことができる。精神のバランスもとれる。

そうなれば、子どもたちも、キレたり、むかついたりすることがなくなるだろう。健全に他者との関係を築けるだろう。大人たちもブランド品にうつつを抜かすこともなくなるだろう。しかも、他人の文章を読んだり、批評したりすることによって、多様な価値観や様々な人間の考え方、感じ方を知ることでもできるようになる。そうすることで、子どもたちはいじめたいという欲求がどれほど馬鹿げているかを理解できるだろう。ブランド依存から逃れられるだろう。時には、そのような衝動に駆られる自分を客観的に見ることもできるようになる。

■「ゆとり教育」を作文教育で

私は、現在の状況を改善するために、もっと多くの人に文章を書くことを実践してほしいと思う。そして、その第一歩として、小・中学校での作文・小論文教育を推し進めることを提唱したい。

八〇年代から、文部省は「新しい学力観」、すなわち「ゆとり教育」を進めてきた。「一人一人の学習意欲を重視して、これまでのような押しつけ教育ではなく、個性を生かし、ゆとりを重視した教育をしよう」というのが、この考え方だ。これまでの画一的な集団教育を反省し、一律的な価値観で競争する受験競争をなくして、一人一人に興味を持たせるような教育をしようとしている。そして、勉強のできる順番をつけるのではなく、それぞれがどれほど自分の能力に見合った努力をしたかということで評価をしようとする。これは、おそらく受験競争の激化とそれへの反抗という形をとった校内暴力を反省した結果、受験競争を緩和させ、受験で押しつぶされそうになっている子どもたちを救おうという意志の表れだっただろう。

この理念に、私は文句をつけるつもりはない。これまで、日本国民は受験競争をしすぎた。一律的な知識を詰め込み、暗記を強要し、思索力や個性を抑圧してきた。もっとゆとりを持ち、独創性を重視するべきではある。そうしてこそ、独創性、思索力、分析力が養成される。

しかし、文部省は、競争をなくし、生徒の負担を減らそうとするあまり、だんだんと学習内容をやさしくし、ついには、中学校では円周率を3とし、教科書から「ルネサンス」を消している。この現在の状況には、反対せざるをえない。

学習内容を減らし、負担を減らせば、すべての生徒たちが勉強意欲を持つと、文部省は考えているようだが、そんなものではない。負担を減らしても、不勉強な生徒は勉強しない。逆に減らせば減らすほど、不勉強な生徒、学力のない生徒が増えていくだけだ。

いや、それよりも問題なのは、本来「個性重視・自主性尊重」だったはずの「新しい学力観」、すなわち「ゆとり教育」が、むしろ「個性抑圧」になってしまっていることだ。

「ゆとり教育」は、先ほど述べたとおり「競争するのではなく、一人一人の個性を尊重しよう。運動ができなくても、努力したのなら評価するべきだ」という考えを強調する。そうすると、「競争否定」の傾向が強まる。だから、運動会で手をつないでゴールする、といったことが起こる。跳び箱を無理に飛ぶ必要はない、自分にあつた高さを飛べばよい、とされる。能力差は見えなくされ、みんなが同じ能力とされる。

そうなると、むしろ、個性を抑圧することになってしまふ。運動能力のある子は、体育の時間に、個性 \parallel 能力を發揮して目立ちたいと思っている。算数のできる子は、算数の時間に目立ちたいと思っている。ところが、それができない。「皆同じ」という平等主義が広まる。すべてにおいて、生徒間で差をつけることがタブーとなる。こうして、能力というものを個性として認めないために、「個性重視」のために出発した「ゆとり教育」が、今では逆に「個性抑圧」になっている。

そして、学校が競争を否定し、子どもたちに勉強させなくなったために、親たちは、公教育に絶望して、ますます子どもを塾に行かせるようになり、私立中学、私立高校を目指すようになっていく。競争否定が、むしろ新たな競争を生み出す結果になっている。それどころか、

「ゆとり教育」は、国民全体の学力低下、つまりは技術・文化の低下 \parallel 国力低下を引き起している。

私は、「ゆとり教育」の本来の理念を尊重するのであれば、もっと別の方法を考えるべきだと考える。たとえば、教師対生徒という一方的な授業形態を見直し、一律的な思考や判断を押しつける教育を改めて、ゼミ形式を採り入れるべきだろう。また、入試制度も大幅に変革するべきだろう。個性重視、独創性重視と、現在の点数化による「公平で平等な入試制度」は明らかに矛盾する。そうした制度面を改める必要がある。

そして、もう一つ提唱したいのが、文章教育だ。

個性重視・自主性尊重をうたうのなら、一つの「正解」を要求し、出題者と意見が合わなければ点を取れない現在の国語の試験を廃止するべきだろう。いや、廃止しないまでも、少なくとも、小論文や作文をもっと重視して、一つの「正解」を求めない入試をふやすべきなのだ。

文章を書くことによって、子どもたちは思索力を手に入れる。個性を、自主性を、独創性を、分析力を身につける。一律ではない、多様な価値観、多様な考え方が身につく。そして、自己表現が豊かになり、自分のアイデンティティを取り戻すだろう。現在、問題になっている様々なことからの解決へ一歩踏み出すことになるだろう。

もちろん、文章教育を軌道に乗せることは難しい。子どもたちに文章を書く楽しさを教えることも、決してやさしいことではない。が、文部省や学校が、もっと文章を重視することによって、「ゆとり教育」は理念にふさわしい形になると考えるのだ。

そして、それが実現することによって、もっと日本全体に文章を書くという行為が広がり、新しい知が始まると思うのだ。

あとがき

文章の奥は深い。私は一冊を通じて、文章の書き方の基本を説明した。私に説明できるのは、ここまでだ。本書は、実は、文章という大山脈への道のほんの入口を書いたものにすぎない。果てには、『源氏物語』『カラマーズフの兄弟』『失われたときを求めて』など巨大な尾根が待ち受けている。

もちろん、私には、そうした尾根にまでは入り込む能力も気力もない。だが、ぜひとも、本書を読んだ若者に、もっと先を開拓してほしい。本書を越えて、先へ先へと進んでほしい。本書は、読者に踏みつけにされるための一冊にほかならないのだから。

「文は人なり」「ありのままに書け」という従来のご指導では、大きな尾根にまでたどり着くことはできないと、私は思う。空想力を羽ばたかせ、言葉の世界を開拓してこそ、大きな尾根に挑むことができるのだ。

最後に、別の形で、「文は人なり」という常識の誤りについて指摘しておこう。

本書を読んだ方は、おそらく私のことを、戦略的で合理的でテキパキした如才のない人間と判断しておられるだろう。論理至上主義者で、自信たっぷり、頭の回転が速い、そう思っておられる方もいるかもしれない。時々、参考書の読者にそのような思われて、とまどうことがある。

もちろん、きつとそのような面もあるのだろう。だからこそ、このような本を書き、このような指導をしているのだろう。

が、何を隠そう、私の頭の回転は速くない。まったくテキパキしていない。優柔不断で怠惰で内向的。実務は何をしてもヘマばかりで、芸術の世界で遊ぶのが好きな人間だ。あの神秘的で謎めいて曖昧模糊としたワグナーの楽劇の世界に浸るのが大好き。文学も非論理的でハチャメチャなものが好きだ。合理精神を徹底的に解体したソニー・ラブ・タンシというコンゴの作家に夢中で、最近も彼の遺作『苦悩の始まり』（新評論・共訳）を訳した。私を昔から知る友人たちは、むしろ私がこのような小論文指導をし、本書のような戦略的な本を書くことに驚いている。

本書は、内向的でテキパキしない私の一世一代の自己演出なのだ。いや、本書ばかりではない。そして、もちろん私ばかりではない。ほとんどの文章は、多様な自分のなかの一部を拡大し、自己演出したものだ。それこそが、ものを書くということの意味であり、その楽しみだと私は思っている。

最後に、私にこの自己演出の場を与えてくださった年下の友、井上佳世さん、そして、温かい励ましと、数々の的確かつ厳しいアドバイスをいただいた新書編集部の中田千春さんに、この場を借りて感謝の言葉を述べたい。お二人の力強い支えがあってこそ、この書は実現したことをつけ加えておく。

なお、小論文の模範解答などの情報をホームページで公開している。アドレスは、

<http://homepage2.nifty.com/higuichi/>

二〇〇〇年秋

樋口裕一